＜研究論文＞

縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進海退(3)

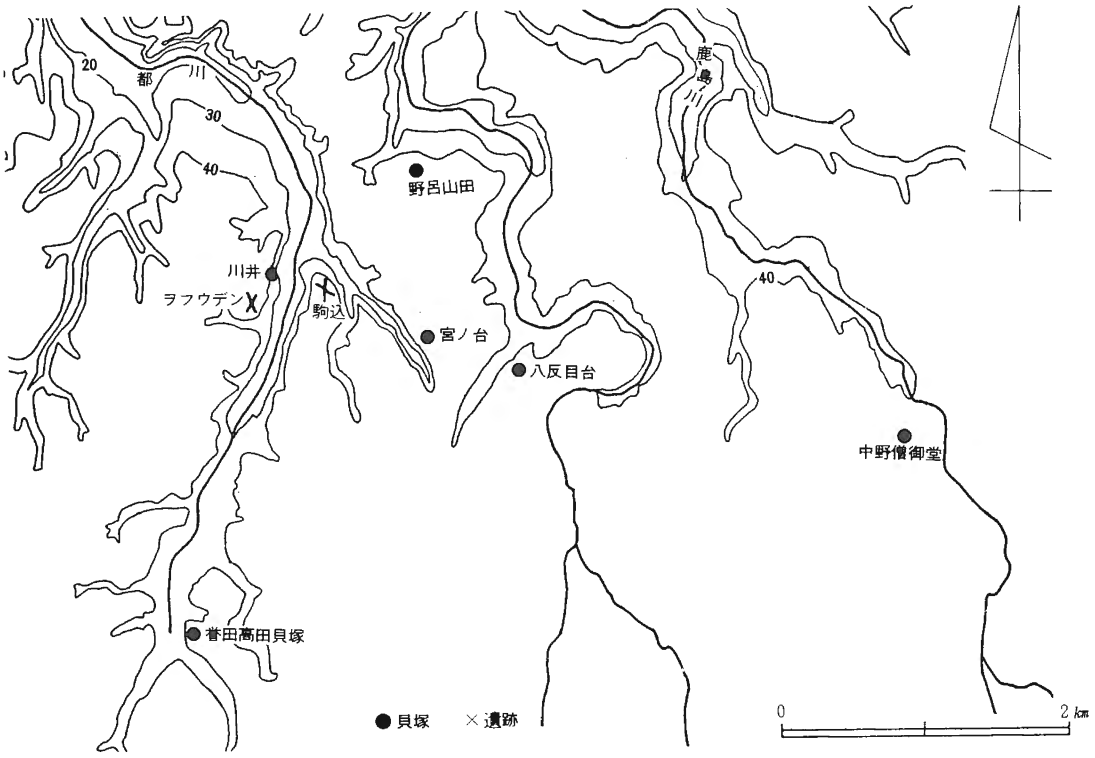
武　田　宗　久

V　現東京湾東岸地域の貝塚分布（別表・付図14, 15, 16参照）

北半部

(7)　鹿島川・都川沿岸

鹿島川は標高91mの千葉市小食土町に源を発し、下総丘陵の北東側を北流して印旛沼に注ぐ延長29キロ。一方、都川は下総丘陵の南西側にあって東京湾に注ぐ。この川の水源は標高50m前後の千葉市誉田町にあり、北々東に約5キロ進み、同市川井町付近の谷を西北方に転じて約5キロ降り、標高10mの底地で坂月川と合流し、さらに約2キロ西進して標高5mとなり、ここで仁戸名川を合せて川幅を広めつつ、亥鼻丘陵の北方に展開する開析平野を進み、川口の手前でよし川を加える、延長約15キロである。



第1図　鹿島川、都川上流地域の貝塚、貝ブロックの分布図

この２つの川の上流域に所在する貝塚・貝ブロック遺跡の分布を見ると、鹿島川沿岸では中野僧御堂遺跡・八反目台貝塚・宮ノ台遺跡・野呂山田貝塚がある。このうち標高53～49.5ｍの中野僧御堂遺跡は、少量の茅山式と加曽利ＥⅢ・Ⅳ式・称名寺式・堀之内Ⅰ式・加曽利Ｂ式土器が発掘されたが、主体は加曽利ＥⅢ～堀之内Ⅰ式期で、加曽利Ｅ式の遺構に伴なう貝ブロックが発見された。(註１)この貝は、外洋性のチョウセンハマグリ・ダンベイキサゴが多く含まれていることから、九十九里海岸からもたらされたものと思われる。（註２）

次に標高53ｍの八反目台貝塚は、堀之内Ⅰ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・安行Ⅰ・Ⅱ式を主体とする後期の点在貝塚で、内湾性のイボキサゴその他を含む主鹹である。宮ノ台遺跡も堀之内Ⅰ～安行Ⅰ式を主とし、堀之内Ⅰ式の住居址内に加曽利Ｂ式期のハマグリ・シオフキ・アサリ・アカニシの貝ブロックが投棄されていた。（註３）　野呂山田貝塚は、標高30～35ｍの点在貝塚で、堀之内Ⅰ～安行Ⅰ・Ⅱ式を主とし、イボキサゴ・ハマグリ・オキシジミ・シオフキ・マテガイなどの主鹹であって、（註４）鹿島川流域では、本貝塚より下流約9.5キロの地点にある四街道市山梨の前広貝塚に至る間、全く貝塚の存在を知らない。

都川の上流には、誉田高田貝塚と川井貝塚がある。このうち誉田高田貝塚は水源地に近い谷奥の右岸に立地し、標高48ｍ、半月形に並んだ４ケ所に貝の散布が見られる馬蹄形貝塚である。昭和29年このうちの２ケ所で行なわれた発掘報告によれば、表土は混貝土層約25㎝で、この中に加曽利Ｂ・安行Ⅰ・Ⅱ式があり、この下に混土貝層が局部的に介在し、堀之内Ⅱ式が含まれる。貝層の厚さは約30㎝前後で、貝はイボキサゴが最も多く、ハマグリ・アカニシがこれに次ぐ純鹹に近い主鹹貝塚で、魚類はマダイ・スズキ・コチ・ボラであったという。（註５）川井貝塚は、本貝塚から都川の谷を約2,5キロ降った左岸にある点在貝塚で、標高33ｍ、ハマグリ・イボキサゴ・アサリ・シオフキなどを含む主鹹で、土器は早期前半と安行Ⅲａ式期のものが僅かに含まれるが、主体は堀之内Ⅰ～加曽利ＢⅢ式期である。（註６）

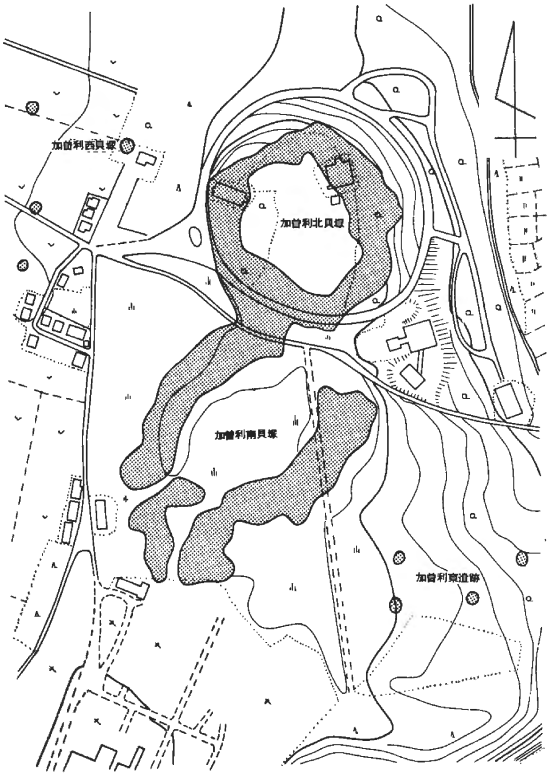
以上の如く鹿島川上流では中野僧御堂遺跡以外の諸遺跡は、いずれも後期前半を主体とするものであり、都川上流でも同様な現象がみられる。しかも全てが主鹹性の貝類を含み、この中に内湾に棲息するイボキサゴが多いことは、これらの地域の縄文人が求めた魚貝類の搬入ルートが東京湾の海辺につながっていたことを示唆する。しかし、これらの遺跡を残した人々のすべてが都川を搬入路にしていたと断定することはできない。例えば、誉田高田貝塚の場合は、その地理的位置から判断すると、後述する仁戸名川の上流にある東水砂第２貝塚・六通貝塚・野田小谷貝塚などとともに、むしろ浜野川や村田川の沿岸海域に搬入路がある可能性が強い。

都川の中流域を見ると、左岸の支谷に多部田貝塚・うならすず遺跡があり、さらに下ると別の小支谷に滝ノ谷貝塚・押元貝塚がある。このうち多部田貝塚は標高35ｍ、谷との比高15ｍ、３ケ所に貝層の分布を認める馬蹄形貝塚で、採集土器は堀之内Ⅰ～安行Ⅱ式であるが、貝層の形成時期は加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ式期である。（註７）うならすず遺跡は本貝塚の北方約700ｍ

にあり、後期の土壙に貝ブロックを含むという。（註８）滝ノ谷と押元の２貝塚は、都川に向ってゆるやかに傾斜する微高地に所在し、前者は標高28.5 mにある点在貝塚で、阿玉台・加曽利Ｅ・堀之内式を主とし、後者は標高16～24mにある馬蹄形貝塚で、加曽利Ｅ式を主とし、堀之内・加曽利Ｂ式がこれに次ぐ。

一方、都川の右岸では標高30mの台地の突端部に加曽利Ｅ式を主とする北谷津貝塚（点在貝塚）があり、これより約2,4キロ降った坂月川との合流点から、坂月川の東側の谷をさかのぼった縁辺台地に加曽利ＥⅣ式を包含する中薙貝ブロック遺跡・阿玉台・加曽利ＥⅠ・Ⅱ式を主とする蕨立・さら坊の２貝塚と、堀之内・加曽利Ｂ式を主とする坂月台貝塚がある。いずれも標高30m前後で、蕨立貝塚は点在馬蹄形、他は点在貝塚である。また西側の谷をさかのぼると東側に加曽利ＥⅢ・Ⅳ式を主とする広ケ作貝塚（点在貝塚）と加曽利ＥⅡ・Ⅲ式を主とする滑橋貝塚（点在馬蹄形）があり、西側に加曽利貝塚群がある。

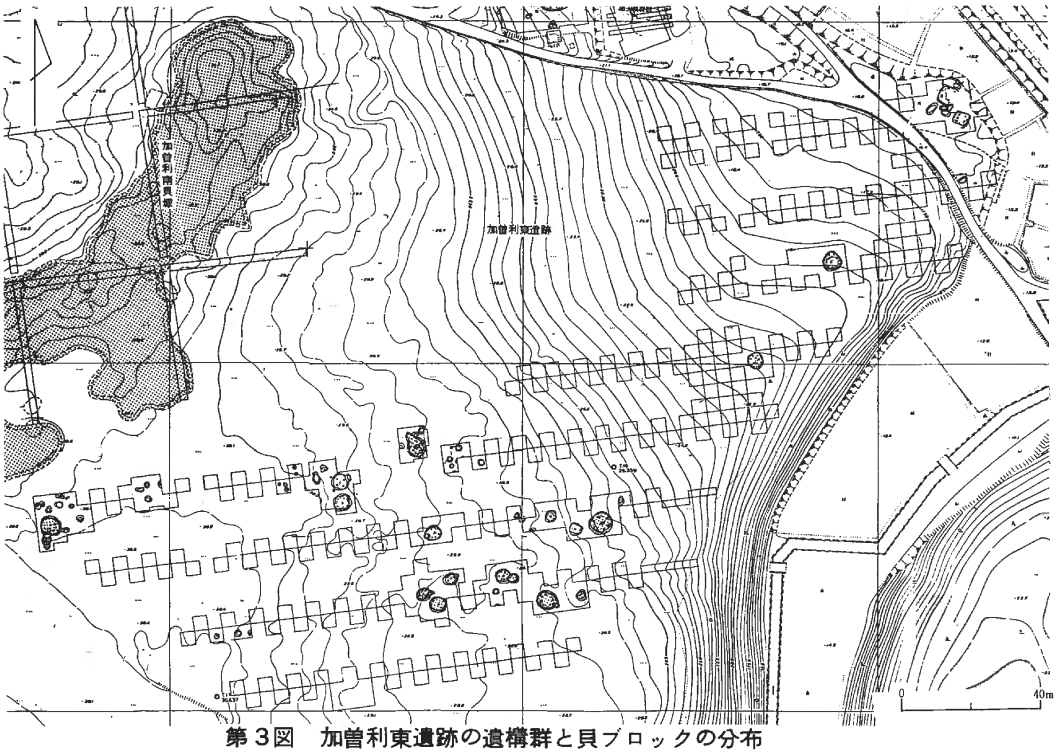
加曽利貝塚群は、加曽利北貝塚・加曽利南貝塚・加曽利西貝塚・加曽利東遺跡を総称し、西貝塚（点在貝塚）以外は大規模な局部的発掘によって、ほぼ遺跡の概要が明らかになった。北貝塚は標高34,5～28m、直径約130mの環状貝塚で、イボキサゴ・ハマグリ・アサリ・シオフキ・ウミニナ・サルボウなど30種を含み、貝層形成時期を思わせる土器は阿玉台・勝坂・原加曽利Ｅ（中峠）・加曽利ＥⅠ・Ⅱ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ式で、このほか加曽利ＢⅢ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ・姥山台Ⅱ式も採集された。（註９）南貝塚は標高32.5～34m、半月形の貝層が３ケ所ある直径約170mの馬蹄形貝塚で、イボキサゴ・ハマグリ・シオフキ・アサリ・オキシジミ・マガキなど35種を含み、貝層形成時期を思わせる土器は称名寺・堀之内Ⅰ・加曽利ＢⅠ・安行Ⅰ式が確認されたほか、阿玉台式と安行Ⅲａ式が混貝土層の貝ブロックに伴なうともいう。このほか勝坂・加曽利ＥⅡ・Ⅲ・堀之内Ⅱ・加曽利ＢⅡ・Ⅲ・安行Ⅱ・姥山台Ⅲ・安行Ⅲｃ・前浦・大洞・大洞Ｂ－Ｃ・大洞C_1も採集された。（註10）東遺跡は南貝塚の東方に接続する平坦地（標高28～32m）から傾斜部（標高15.5～24m)にかけての部分で、平坦部の調査は昭和45・46・47年度（第１・第３・第４次）に、傾斜部の調査は昭和46年度（第２次）に実施された。この結果、平坦部から採集された土器は阿玉台・加曽利ＥⅠ・Ⅱ・Ⅲ・堀之内Ⅰ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・安行Ⅰ・安行Ⅱ式で、発見された住居址は阿玉台式期２・加曽利ＥⅡ式期９・加曽利ＥⅡ～Ⅲ式期１・加曽利ＥⅢ式期１・堀之内Ⅰ式期１・安行Ⅰ式期１・小竪穴は阿玉台式期４・加曽利ＥⅠ式期２・加曽利ＥⅡ式期11・加曽利ＥⅢ式期10・時期不明のもの15であった。右のうち貝ブロックを伴なう住居址は５、小竪穴は２である。その内容を見ると、加曽利Ｅ式期の住居または小竪穴が一旦廃棄された後、同一時期に貝ブロックを投入したものと、堀之内Ⅰ式期の住居が廃棄され、加曽利ＢⅡ式期になってから貝ブロックを投入したものとがある。次に傾斜部から採集された土器は、井草・茅山・関山・黒浜・諸磯・浮島・加曽利ＢⅠ式で、発見された遺構は茅山式期の炉穴５・関山式期の住居址１・黒浜



第２図　加曽利貝塚群の分布状況

式期の住居址１・加曽利ＢⅠ式期の住居址１であったが、いずれも貝ブロックは認められなかったという。（註11）つまり東遺跡は「加曽利東点在貝ブロック遺跡」と称した方がより適切な表現の仕方である。

坂月川との合流点から都川をさらに西進して、標高５ｍの地点で仁戸名川を加える。この川を3.6キロほどさかのぼった千葉市平山町で、東南方に向う平山川を分岐し、仁戸名川は南方に浸入する。さて、平山川の上限貝塚は、右岸の標高45～46ｍにある東水砂第２貝塚で、ハマグリ・アサリ・イボキサゴ・マガキを主とする加曽利ＥⅢ・Ⅳ式期の点在貝塚、これよりやや下流の左岸にある長谷部貝



第３図　加曽利東遺跡の遺構群と貝ブロックの分布

加曽利東遺跡発見の貝ブロック遺構						
立　地	標　　高	遺構と時期	貝ブロック	貝ブロックの時期	貝の種類	備　　考
平坦部	32～30m	竪穴住居址 加曽利EⅡ式	○	加曽利EⅡ式	ハマグリ・シオフキ・アサリ・マガキ・キサゴ	
		〃	○	〃	ハマグリ・シオフキ・キサゴ・マガキ	(昭和46年度) 第3次発掘調査区
		竪穴住居址 加曽利EⅡ～Ⅲ式	○	加曽利EⅡ～Ⅲ式	ハマグリ・シオフキ・キサゴ	
		小　竪　穴 加曽利EⅡ式	○	加曽利EⅡ式	カ　キ	
		小　竪　穴 加曽利EⅢ式	○	加曽利EⅢ式	貝種記載なし	
		竪穴住居址 加曽利EⅡ式	○	加曽利EⅡ式	貝種記載なし	
平坦部	31～28m	竪穴住居址 堀之内Ⅰ式	○	加曽利BⅡ式	キサゴ・ハマグリ・アサリ・アカニシ・ツメタガイ・シオフキ	(昭和47年度) 第4次発掘調査区

塚は標高41m、阿玉台・加曽利E・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ式を貝層に包含すると思われる馬蹄形貝塚、さらに約1.5キロ下流の右岸には点在馬蹄形の築地台貝塚があり、これより少し降ると吾妻貝塚がある。築地台貝塚の調査によると、貝塚の規模は長径110m、短形100mで、採集土器は加曽利EⅢ・Ⅳ・称名寺・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb・前浦・姥山台・大洞B－C・荒海であるが、晩期には貝層を伴なわないとある。(註12)　吾妻貝塚（点在貝塚）は諸磯・阿玉台・加曽利E・堀之内・加曽利B式土器を含むが、貝層は中～後にあるものと推測される。また、左岸にある台畑貝塚は、加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ式期の点在貝塚である。

一方、仁戸名川の上限左岸には六通貝塚がある。標高40～47mを測り、南西側に村田川の支流が刻んだ茂呂谷津と称する支谷の谷頭があって、両方の分水嶺の地点にある。この貝塚は早くから注目された大型馬蹄形貝塚で、南側に開口する。貝塚の規模は東西約140m、南北約125mで、1m以上の堆積貝層がある。イボキサゴが多く、シオフキ・ハマグリ・カガミガイ・アカニシ・オキシジミ・サルボウなどの純鹹に近い主鹹の貝類を含む。採集土器は少量の諸磯式と堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲc であるが、貝層形成の時期は後期であろう。(註13)　六通貝塚から仁戸名川の谷をやや降った右岸にあるのが、加曽利E～加曽利B式を包含する野田小谷貝塚である。さらに約3キロ降ると平山川との合流点から少し手前の左岸に菱名貝塚、右岸に立堀貝塚がある。このうち、菱名貝塚はハマグリ・イボキサゴ・シオフキを主とする点在馬蹄形貝塚で、阿玉台・勝坂・加曽利EⅠ・Ⅱ式土

器を含むが、主体は加曽利ＥⅠ式である。（註14）　立堀貝塚は、地点貝塚で堀之内～加曽利Ｂ式期であろう。

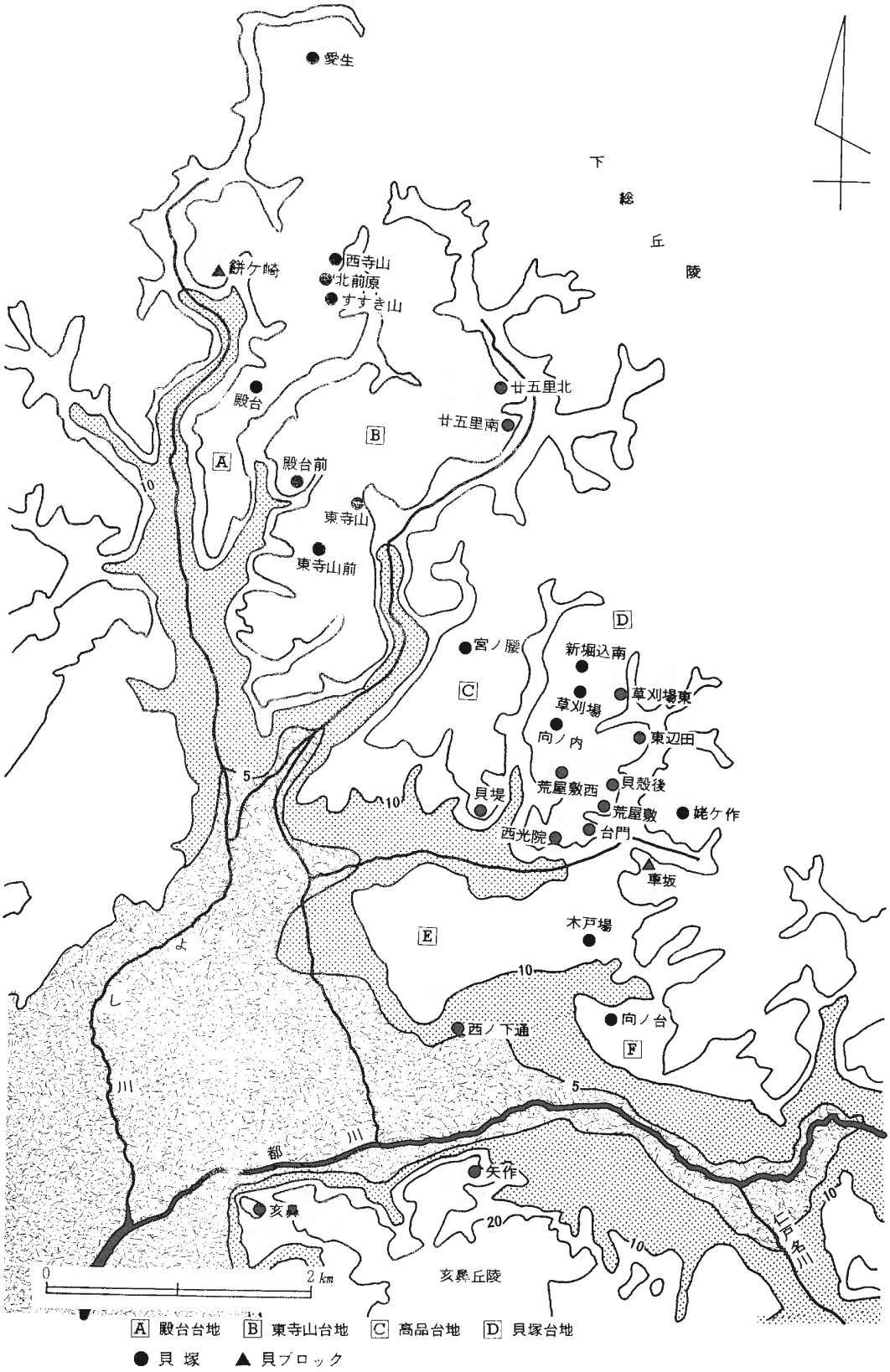
平山川との合流点から仁戸名川を約1.7キロ下ると標高10ｍ線に達する。この左岸の台地縁辺にへたの台・月ノ木・高崎台の３貝塚がある。いずれも中～後期の遺跡で、標高は20ｍ前後である。へたの台は阿玉台・加曽利ＥⅠ・Ⅱ式期の点在貝塚、月ノ木は馬蹄形貝塚で貝層の厚さは１ｍ前後を測り、谷の方向に開口する。加曽利Ｅ・堀之内・加曽利Ｂ式土器を含み、加曽利ＥⅡ式期の住居址に伴なう貝層が確認されている。（註15）

都川の下流は仁戸名川との合流点から東京湾に注ぐ河口までの間で、標高５ｍ未満の沖積低地が広くつらなり、南側は亥鼻丘陵にはばまれ、北側は下総丘陵に大きく食いこんだいくつもの浸食谷があって、この谷と谷に挾まれた舌状台地の縁辺に、早・前・中・後期の貝塚や貝ブロック遺跡が爆発的に密集する。いまこれらの舌状台地を仮に西から東南に、殿台台地・東寺山台地・高品台地・貝塚台地・宝導寺台台地・向ノ台台地と名ずけ、それぞれの台地に分布する遺跡を検討することにする。

殿台台地では西側の谷をさかのぼると、よし川の水源近くに加曽利ＥⅡ・Ⅲ式期の愛生貝塚がある。ここから約１キロ下ると餅ケ崎貝ブロック遺跡、さらに約700ｍ下ったところに殿台貝塚がある。餅ケ崎は標高25～28ｍ、採集土器は井草・夏島・稲荷台・田戸下層・鵜ケ島台・茅山・浮島・五領ケ台・阿玉台・勝坂・加曽利ＥⅡ・Ⅲ・Ⅳ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅡ・Ⅲ・安行Ⅰ式で、発掘報告によれば土拡105基のうち加曽利ＥⅣ式期の25基に、ハマグリ・イボキサゴを主とする貝ブロックがあったという。（註16）　殿台貝塚は標高24ｍ、２つの貝層分布からなる馬蹄形貝塚で、採集土器は黒浜・加曽利Ｅ・加曽利Ｂ・安行Ⅱ・Ⅲａ・Ⅲｂ・姥山台Ⅱ式であるが、貝層形成時期は後期と思われ、安行Ⅱ式期にも貝層があるという。（註17）　一方、東側では谷奥に加曽利Ｅ式を主とする西寺山・北前原の２貝塚とすすき山貝ブロック遺跡とが近接した位置にある。すすき山は標高26～28ｍ、加曽利ＥⅢ式期の住居址・小竪穴10数基にイボキサゴ・ハマグリ・シオフキ・アサリの貝ブロックが発見された。（註18）

東寺山台地では西側の谷に面して殿台前、東側の谷奥に面して廿五里北・廿五里南があり、この谷を800ｍほど下った支谷に面して東寺山がある。さらに少し下って標高10ｍ線の谷川に面して東寺山南の５貝塚がある。右のうち殿台前は標高24ｍ、堀之内・加曽利Ｂ式を主とする後期の点在貝塚、廿五里北は加曽利Ｅ式を主とし、廿五里南は加曽利ＥⅠ・Ⅱ・堀之内式を主とする。いずれも標高28～29ｍに立地する点在馬蹄形貝塚で、イボキサゴ・ハマグリ・アサリ・シオフキ・オキアサリ・カガミガイが多い。東寺山貝塚も標高28ｍ、貝類もほとんど変らない。採集土器は阿玉台・加曽利ＥⅠ・Ⅱ・堀之内・加曽利Ｂ・安行Ⅰであるが、主体は中期の馬蹄形貝塚（註19）、東寺山南は標高26ｍ、阿玉台・加曽利Ｅ式期の点在貝塚である。

高品台地には西側の谷奥に面して宮ノ腰、東側の谷の開口部に面して貝堤の２貝塚がある。



第４図　都川下流周辺の地形と貝塚・貝ブロック遺跡の分布

いずれも標高は28～30mで、宮ノ腰は浮島を主とし、加曽利E式も少量含む。貝堤は茅山・諸磯a・b・c・浮島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・興津・加曽利B・安行Ⅰ式を採集するが、貝層は浮島・諸磯式期であろう。両貝塚はハイガイ・ハマグリ・アカニシが多い点在貝塚である。（註20）

貝塚台地は東西約600m、南北約1.5キロ、標高は局部的に30mを越すところもあるが、大部分は28m前後の平坦な地形で、東西の谷との比高は19m前後である。台地の南側は西から東へ入りこんだ谷をへだてて宝導寺台台地を望み、これが防風の役割をはたす。もしも、都川下流の沖積低地が縄文時代のある時期に、古千葉湾を形成していたとすれば、この谷間は波静かな入江で、絶好な漁場であり船泊りであったろう。

台地上に密集する貝塚群の内容を分析して貝層形成の時期を推定すると、漁撈活動が初めて開始された集落は、西側の谷に面する荒屋敷西貝塚であって、採集土器に黒浜・諸磯a・b式が多く、貝種にハイガイ・ハマグリ・アカニシ・ツメタガイがめだつことから、前期後半のことであろう。中期になると草刈場・草刈場東・向ノ内・東辺田・貝殻後・荒屋敷・台門・西光院とこの台地の全面に広がり、しかも草刈場・荒屋敷のような馬蹄形貝塚が含まれる。ところが後期になると、東辺田・貝殻後・荒屋敷・西光院の諸貝塚は衰え、新たに新堀込南貝塚が加わる。右のうち草刈場と台門は、さらに晩期初頭のころまで貝層の形成があったかもしれない。

宝導寺台台地は、東から西へ大きく張りだし、東側は標高28m、西側は約18mを測る。西側突端部の字名は北半部が根本台、南半分が宝導寺台である。この台地の基部には車坂遺跡と木戸場貝塚がある。車坂は浮島・諸磯・阿玉台・加曽利E・称名寺・加曽利B式土器を含むが、主体は浮島と諸磯が圧倒的に多く、諸磯式の小竪穴に貝ブロックが検出されている。（註21）木戸場は夏島・浮島・諸磯a・bを含むが、主体は諸磯式期の点在貝塚である。

向ノ台台地は都川に最も近い位置にある小さな舌状台地で、標高は約18m、ここにある向ノ台貝塚はマガキ・ハイガイ・サルボウ・ハマグリ・アカガイ・イタボガキなど22種類を含み採集された土器は、田戸上層・子母口・茅山・諸磯式で、茅山式期に貝層を伴ない、竪穴住居址と炉穴群が発見された。（註22）

西ノ下通貝塚について

この貝塚の発掘地点は都町字西ノ下通676番地である。貝層の分布範囲は西ノ下通から字西ノ下（676, 677, 673）にわたるものと思われる。標高は7～8mの沖積低地である。発掘報告では宝導寺台貝塚と名づけたが、この字名は本貝塚の北側にある台地の字名で、本貝塚はその直下に存在することから、本稿では西ノ下通貝塚とした。昭和43年千葉市の都市計画道路の整備に伴なう拡幅工事の際、加曽利貝塚博物館が発見し、部分的な緊急発掘が行なわれた。報告書によると、厚さ約2mを測る表土および黒褐色土層の下に貝層がある。貝層上面の標高は6.5～7m、貝層直下の砂層上面の標高は4～4.6mで、この砂層は現在の東京湾沿岸にある

千葉市貝塚町貝塚群と貝層形成の時期

貝塚名	所在地	規模	貝層形成の時期（推定）					採集土器の形式（加E＝加曽利E・堀＝堀之内・加B＝加曽利B・安＝安行）	主要文献
			早	前	中	後	晩		
新堀込南	貝塚町新堀込	点在						称名寺・堀Ⅰ・堀Ⅱ・加BⅠ・加BⅡ・安Ⅰ・安Ⅱ・安Ⅲa	①
草刈場	〃 木戸作	馬蹄形					?	黒浜・浮島・下小野・阿玉台・加E・称名寺・堀Ⅰ・堀Ⅱ・加B・曽谷・安Ⅰ・安Ⅱ・安Ⅲa・安Ⅲc	②③④⑩
向ノ内（草刈場南）	〃 向ノ内～尻籠	点在						諸磯a・浮島・阿玉台・加E・堀Ⅰ・堀Ⅱ・加B・安Ⅰ・安Ⅱ安Ⅲ	①②④⑤⑩
草刈場東	〃 谷ツ上	点在						加E・称名寺・加B・安Ⅰ・安Ⅱ	①③
東辺田（荒屋敷北）	〃 東辺田	点在						夏島・黒浜・浮島・阿玉台・加EⅣ・称名寺・堀Ⅰ・加B・安Ⅰ・安Ⅱ	③④⑥⑩
貝殻後	〃 貝殻後	点在						阿玉台・加EⅠ・加EⅡ・加B	⑨
荒屋敷	〃 畑中	馬蹄形						黒浜・諸磯a・浮島・五領が台・阿玉台・勝坂・加EⅠ・加EⅡ・加EⅢ・加EⅣ・称名寺・堀・加B・安	③⑦⑧⑨
荒屋敷西	〃 貝塚向	点在						関山・黒浜・諸磯a・諸磯b・浮島・興津・加E・安Ⅱ	②③④⑩
台門	〃 台門～殿作	馬蹄形					?	黒浜・五領が台・阿玉台・加E・称名寺・堀Ⅰ・加B・安Ⅰ・安Ⅱ・安Ⅲa・安Ⅲb	②③④⑩
西光院（干場）	〃 干場	点在						阿玉台・加E・加B・堀	①③

文献名

① 日暮晃一『千葉市貝塚町貝塚群の研究予報』昭和57年
② 伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年
③ 宍倉昭一郎「貝塚町貝塚群の現状とその歴史的意義」（日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会『貝塚町貝塚群と原始集落』）昭和51年
④ 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
⑤ 柿沼修平ほか「草刈場貝塚南側付近採集の遺物について」（『ふさ』）2　昭和47年
⑥ 千葉県文化財センター『千葉市荒屋敷北貝塚・谷津上・須摩堀遺跡』昭和61年
⑦ 千葉県文化財センター『千葉市荒屋敷貝塚』昭和51年
⑧ 千葉県都市公社『千葉市荒屋敷貝塚』昭和49年
⑨ 千葉県文化財センター『千葉市荒屋敷貝塚』昭和53年
⑩ 千葉市教育委員会『千葉市史史料篇』Ⅰ　昭和51年

砂泥性の海成砂層と同質のものと認められる。砂層の近くには炭火物を多量に含む厚さ5㎝前後のうすい泥炭層が非常に広い範囲で堆積し、この層や砂層直上の混土貝層には関山式や黒浜式の土器の破片が含まれる。貝層はハマグリ・マガキ・ハイガイを主とするもので、その厚さは 1.5～2.5 *m*を測り、この中に焼けた貝ブロックや灰層が複雑に介入し、全体として帯状に堆積し、しばしば赤褐色の酸化鉄が付着する。貝層中の遺物の出土状況を見ると、土器は下部から上部に関山・黒浜・諸磯a ・b ・c ・浮島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・五領が台・下小野がほぼ間断なく続く。しかし、これらの土器と石器の量は発掘面積の割には極めて少なく、しかも土器はほとんど小破片で完成品はなく、石器はすり石・砥石・たたき石・石皿といった調理加工具が多く、土掘り具と思われる斧形石器はあるが、利器はない。獣・魚骨は豊富で灰層中に多い。このほか小型の自然石が大量に含まれ、貝層の上部から中部にかけて多く出土し、加熱を受けているものが多く、「貝層中に何ケ所となく堆積する焼貝層や灰層の存在を考えると、当時海岸であったと思われるこの周辺で、頻繁に火が焚かれていたことが想像される」という。報告者は以上の諸点から、貝層が帯状に堆積するのは「海水の干・満によって、当初はブロック状に捨てられた貝層が、しだいにならされて平らになったものであり、貝層や出土遺物に付着した酸化鉄も同様の所産と考えられる」とし、この貝塚の性格は集落遺跡ではなく、獣類や魚貝類の捕獲、採集の拠点であろうことを示唆している。（註23）

筆者は、この貝塚が標高4～4.6 *m*の海成砂層上にあって、貝層の厚みが2 *m*前後もあり、しかもその堆積状況が海水の流入によって変化したことを想わせる帯状であること、貝層の中に縄文前期前半から中期初頭にかけての土器が、ほぼ時代順に含まれていること、貝層中に何ケ所も集石炉の存在を暗示するところがあることなどを総合すると、都川の下流地帯にあったであろう古千葉湾の成立と海進の状況が、本貝塚の貝層の中に可視的に凝縮されている希少な遺跡であると理解すべきものと考えている。この点に関しては、いずれ別項で述べることにする。

次に、亥鼻丘陵には矢作貝塚と亥鼻貝塚がある。矢作は標高27 *m*、堀之内式期に貝層を伴なう馬蹄形貝塚で、採集土器は茅山・諸磯・加曽利E・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa 式である。（註24）　亥鼻は標高約20 *m*、堀之内・加曽利B式を採集する地点又は点在貝塚と思われるが、千葉城の構築と明治初期の土砂採掘によって削平された部分が多く、僅かに貝殻の分布を残すだけで、詳細は不明である。

都川の下流周辺には、この外に点在貝塚として姥ケ作と北原がある。姥ケ作貝塚は貝塚台地の東側の谷向うにあり、阿玉台・加曽利E式期、北原貝塚は高品台地の西側の谷奥からやや離れた地点にあって、茅山・浮島・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ式を採集するが、主体は後期である。

1. 草刈場貝塚　2. 向ノ内貝塚　3. 荒屋敷西貝塚　4. 東辺田貝塚
5. 荒屋敷貝塚　6. 台門貝塚　7. 姥ケ作貝塚　8. 車坂遺跡　9. 新堀込南貝塚
10. 草刈場東貝塚　11. 貝堤貝塚　12. 貝殻後貝塚　13. 西光院貝塚

第5図　貝塚町貝塚群

註1　千葉県文化財センター『千葉市中野僧御堂遺跡』昭和52年

註2　中野僧御堂遺跡出土の貝類は現在千葉県房総風土記の丘博物館に保管されており、筆者は平成元年同博物館学芸課長岡川宏道氏のはからいで実見し、貝類がチョウセンハマグリ・ハマグリ・ダンベイキサゴ・シオフキ・マガキ・オキシジミであることを知った。ここに便宜を与えられた岡川氏に謝意を表する。

註3　田中英世「千葉市八反目台貝塚」（『加曽利貝塚博物館紀要』）11　昭和59年。この中に宮ノ台遺跡に関する記事がある。

註4　川戸彰「野呂山田貝塚」（『印旛手賀』）昭和37年。千葉市教育委員会『千葉市野呂町道路拡幅工事に伴なう遺跡確認調査』昭和51年

註5　学習院高等科史学部『誉田高田貝塚』昭和30年。

註6　千葉市教育委員会『千葉市埋蔵文化財分布地図改訂版附篇』昭和59年

註7　前田潮「千葉県多部田貝塚出土遺物遺体」（『大塚考古』）5　昭和39年

註8　千葉市教育委員会「ヲフウデン遺跡発掘調査報告書」（『千葉市文化財調査報告第1集』）昭和51年に記載する。

註9　加曽利貝塚博物館『加曽利貝塚』Ⅰ　昭和42年・同『加曽利貝塚』Ⅲ　昭和45年・同『加曽利貝塚』Ⅳ、昭和46年・「加曽利貝塚東傾斜面第5次発掘調査概報」（『加曽利貝塚博物館紀要』）8　昭和57年

註10　加曽利貝塚博物館『加曽利貝塚』Ⅱ、昭和43年・同『加曽利貝塚博物館紀要』6　昭和56年

註11　「昭和45・46年度加曽利貝塚東傾斜面遺跡限界確認調査概報」（『加曽利貝塚博物館紀要』）6　昭和56年・「昭和47年度加曽利南貝塚東傾斜面発掘調査概報」（『同紀要』）7　昭和56年

註12　久保常晴「千葉県千葉郡築地台貝塚」（日本考古学協会『昭和25年度日本考古学年報』）昭和30年・千葉県文化財センター『千葉市築地台貝塚』昭和53年

註13　千葉県文化財センター「六通貝塚貝層範囲確認調査」（『研究連絡誌』）18　昭和61年

註14　後藤和民・庄司克「千葉市平山町菱名貝塚調査概報」（『加曽利貝塚博物館紀要』）2　昭和44年

註15　千葉市『千葉市誌』昭和28年

註16　千葉市教育委員会『千葉市源町餅ケ崎遺跡発掘調査予報』昭和55年・千葉市文化財調査協会『千葉市餅ケ崎遺跡』昭和63年・横田正美「柄鏡形住居址とその遺物について」（『加曽利貝塚博物館紀要』）9　昭和58年

註17　阿部芳郎「千葉市殿台町殿台貝塚出土の遺物について」（『加曽利貝塚博物館紀要』）8　昭和57年

註18　後藤和民・庄司克「すすき山遺跡発掘調査概報」（『加曽利貝塚博物館紀要』）5　昭和47年

註19　宍倉昭一郎「廿五里南遺跡」（『日本考古学年報』）24　昭和48年・東寺山遺跡群発掘調査会『千葉市東寺山遺跡群発掘調査報告書』昭和45年

註20　寺門義範「縄文時代前期後半の一資料」（『加曽利貝塚博物館紀要』）12　昭和60年

註21　千葉県都市公社『京葉』昭和48年

註22　千葉県立千葉第一高等学校郷土研究部「千葉市都町字向ノ台貝塚の発掘に就いて」（『かつらぎ』）復刊号、昭和22年・千葉市『千葉市誌』昭和28年

註23　庄司克「千葉市都町宝導寺台貝塚発掘調査概報」（『加曽利貝塚博物館紀要』）3　昭和45年

註24　武田宗久「下総国矢作貝塚発掘報告」（『考古学』）9巻8号　昭和13年・千葉県文化財センター『千葉市矢作貝塚』昭和56年

(8) 亥鼻丘陵西側と浜野川沿岸

東に都川の支流仁戸名川、西に東京湾の海岸平野を望む亥鼻丘陵は、古千葉湾に面するあたりで標高20～27ｍであるが、南東に行くに従って次第に高度を増し、浜野川の上流縁辺の台地から村田川の北岸では40～50ｍに達する。この丘陵の西側を蚕食する樹枝状の谷々の縁辺に立地する貝塚と貝ブロック遺跡の分布を概観すると、標高の低い北半部には小規模なものが散在し、南半部では大小さまざまな規模の遺跡が多く、特に浜野川と村田川に挟まれた周辺の台地に濃厚である。

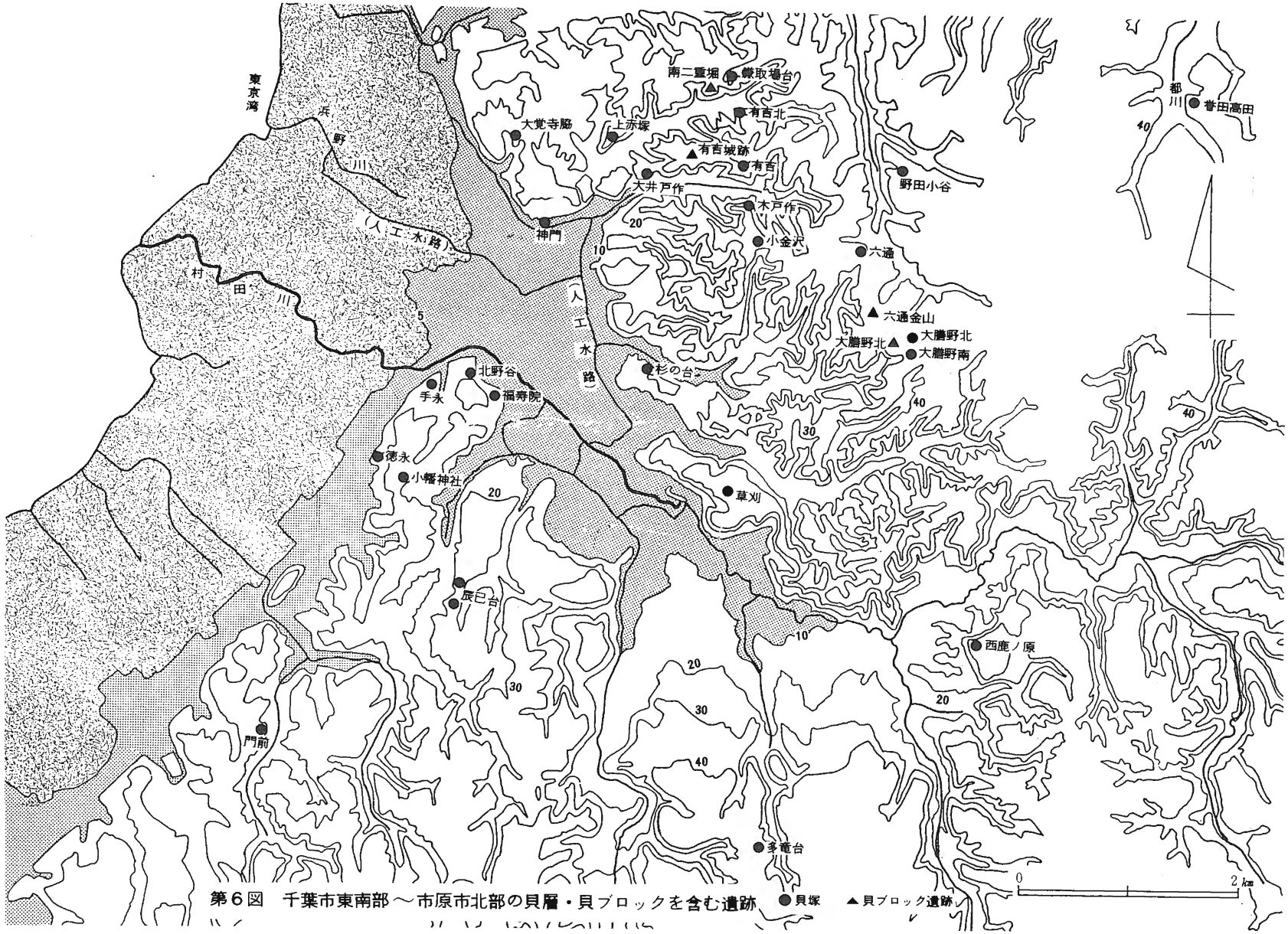
まず北半部を見ると、千葉寺町の小支谷に稲荷山と鷲谷津の点在貝塚がある。稲荷山は諸磯式を主とし、鷲谷津は堀之内・加曽利Ｂ式期である。宮崎町支谷に面するオクマンノ貝塚は茅山式の点在貝塚、今井町の小舌状台地にある狐塚は堀之内・加曽利Ｂ式期の地点貝塚、赤井町支谷に面する点在貝塚の雉ノ宮は堀之内式期、生実町の小支谷の奥にある大覚寺山脇貝塚は堀之内・加曽利Ｂ式期の点在貝塚である。ただこの小支谷の開口部の東側の舌状台地にある森台貝塚は、半月形の貝層が２ケ所にある馬蹄形貝塚で、ハマグリ・アサリ・シオフキ・イボキサゴなどが多い。採集土器は、鵜ケ島台・茅山式を僅かに含むが、主体は堀之内・加曽利Ｂ式である。

南半部では、浜野川の水源をなす通称赤塚谷の泉谷の縁辺台地に密集する。昔はこの２つの谷奥には豊富な湧水池があって、そこから流れ出る水は南生実町と椎名崎町との境で合流し、南生実町字神門の低湿地を西進して東京湾へ注いでいた。つまりこれが浜野川の本流である。ところが慶長年間（1596～1614）南半部の海岸平野一帯の潅漑用水を確保するために、村田川の水を導く人工水路（通称草刈堰）を造った。このため現在は字神門と浜野川との間の自然の水路がほとんど消滅に近い状態になっている。（註１）

さて、赤塚谷の北岸には標高30～37ｍの地点に鎌取場台貝塚・南二重堀遺跡・上赤塚貝塚があり、南岸には有吉北貝塚がある。また、泉谷津では、標高40～42ｍの地点の北岸に有吉貝塚有吉城跡遺跡・大井戸作貝塚、南岸に木戸作貝塚がある。

本稿ではこれらの遺跡と村田川沿岸に分布する貝類を包含する遺跡を「千葉市東南部～市原市北部の貝塚・貝ブロックを含む遺跡」と題する一覧表にまとめて、それらの規模・貝層・貝ブロック形成の時期・採集した土器の形式を掲示することにした。従って以下に記載する遺跡は特に補足説明を要するものに限定した。

南二重堀遺跡の発掘報告によれば、採集土器は稲荷台式と加曽利Ｅ式が主体をなし、遺構は黒浜式・阿玉台式住居址各１軒・加曽利Ｅ式住居址数軒と土壙６基がある。このうちの１基は加曽利Ｅ式期で、イボキサゴを多量に含む貝ブロックが検出された。（註２）また、有吉北貝塚は全面積の約３分の２を発掘した結果によれば、規模は長径130～短径100ｍ の点在馬蹄形を呈し、貝層は台地上と斜面にあり、貝層形成の時期は加曽利Ｅ式直前から加曽利ＥⅢ式期

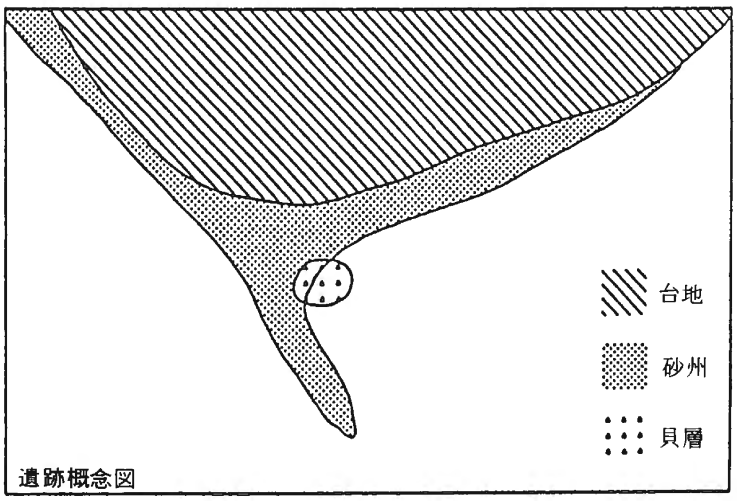


第６図　千葉市東南部～市原市北部の貝層・貝ブロックを含む遺跡

にかけてであるという。なお早期末葉の炉穴群も検出されたが、貝ブロックを伴なうものは皆無であった。（註３）　有吉城跡遺跡は、戦国時代に後北条氏の築城にかかり、里見氏との攻防戦が展開された戦場でもあるだけに、縄文時代の遺構の大部分は破壊されていたようである。発掘報告によれば、早期終末の条痕文土器を伴なう炉穴群と土壙群が発掘された。このほか時期不明のハイガイ・カキを伴なう土壙があったという。（註４）　木戸作貝塚は後述する小金沢貝塚とともに全面発掘された点在馬蹄形貝塚で、長径 140 *m*、短径 110 *m*の規模をもち、７つの地点貝塚によって構成され、その分布は台地縁辺から北側の斜面にかけてである。貝層に堆積する大部分は堀之内Ｉ式期という短期間に形成された。本貝塚の貝類はイボキサゴが圧倒的に多く、次いでハマグリ・シオフキ・アラムシロ・ウミニナなどの内湾の砂質底に発達する潮間帯から水深数*m*以浅に生息するものである。このことから、発掘報告者は本貝塚が「営なまれていた当時、泉谷津と赤塚支谷との出合付近の海域に生息していたものであり、これらの貝類を採取するために、遺跡から西へ約１キロ下る必要があった」と推定している。（註5）

神門貝塚について

本貝塚は、赤塚谷津と泉谷津を流れる水が合流する地点から西へ約 700 *m*、 木戸作貝塚からは直線距離で約 1.6 キロ下流にある低湿地の地下深く埋蔵されていた早期後半から前期の貝塚である。この貝塚発見の動機は、昭和50年から千葉市東南部の南生実・有吉・大膳野・大金沢・小金沢・椎名崎・富岡等の各町一帯約 605 ヘクタールに、「おゆみの」と称する住宅団地を造成する事業に伴なう排水工事と東京湾岸部を結ぶ計画道路を建設する計画に基づき、千葉県文化財センターが、昭和60年に遺跡の確認調査を実施中に発見したものである。発掘調査は排水工事部分を千葉県文化財センターが昭和60年６月～同62年３月まで、隣接する北側の道路予定部分を千葉市文化財調査協会が昭和62年６月～同63年３月まで実施した。この結果、千葉県文化財センターが行なった予備調査（昭和60年６月～同61年３月）の報告は、昭和63年３月発行の『千葉市浜野川遺跡群』の中に収められているが、本調査の報告は発行されていない（平成２年２月現在）。けれども、本貝塚の重要性に鑑み、本稿では千葉県文化財センターと千葉市文化財調査協会が今日までに発表した諸資料を総合して概



第７図　千葉市南生実町神門貝塚（寺門義範原図）

千葉市東南部～市原市北部の貝塚・貝ブロックを含む遺跡

名称	所在地	規模	貝層・貝ブロック形成の時期（推定）					採集土器の形成（加E＝加曽利E・堀＝堀之内・加B＝加曽利B・安＝安行）	主要文献
			早	前	中	後	晩		
大覚寺山脇	千葉市生実町大覚寺脇	地点				―		堀・加B	①
鎌取場台	鎌取町鎌取場台	点在				―		堀・加B	②
南二重堀	生実町2857－1 他	点在			貝ブロック ―			稲荷台・黒浜・浮島・阿玉台・加E Ⅰ・Ⅱ・堀	③
上赤塚	南生実町上赤塚	馬蹄形				―		茅山・加E・堀・加B・安Ⅰ・Ⅱ	②
森台	南生実町南生実台973	馬蹄形				―		鵜ケ島台・茅山・堀・加B	④
有吉北（日照田）	有吉町日照田730 他	点在馬蹄形			―			茅山・中峠・阿玉台・加E Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・称名寺・堀・加B・安Ⅰ・Ⅱ	⑤
有吉城跡	有吉町有吉城址	点在	貝ブロック ―？―					茅山上層	⑥
大井戸作	有吉町駒見台大井戸作	点在				―		加E・堀・加B	⑦
有吉（有吉南）	有吉町有吉～宮前	点在馬蹄形			―？―			加E Ⅰ・Ⅱ・堀Ⅰ・Ⅱ・加B	②④⑦
木戸作	椎名崎町859	点在馬蹄形				―		加E・称名寺・堀Ⅰ・加B	⑧
神門	南生実町神門740 他	地点	―	―				鵜が島台・茅山・花積下層・関山Ⅰ・Ⅱ・黒浜・浮島Ⅰ・諸磯a・b・c・十三菩提・興津・阿玉台・加EⅡ・堀Ⅰ・加BⅠ・Ⅱ・荒海	⑨
小金沢（堂面）	小金沢堂面929－4 他	点在馬蹄形				―		茅山・黒浜・加EⅣ・堀Ⅰ・加B・安Ⅰ・Ⅱ	⑩
六通	小金沢町六通332 他	馬蹄形				―	？	堀Ⅰ・Ⅱ・加BⅠ・Ⅱ・Ⅲ・曽谷・安Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲc	⑪

六通金山	大金沢向田西480 他	点　在			貝ブロック			茅山・加EⅢ・Ⅳ	⑫
野田小谷	誉田町野田字小谷	点　在						阿玉台・加EⅢ・加B	①⑦
誉田高田	高田町冬寒台・中芝・貝塚	馬蹄形						加E・堀・加B・安Ⅰ・Ⅱ	⑬
大膳野北（大膳野）	大膳野町大膳野	点　在						加E・堀・加B	②④⑦
大膳野北	大金沢町543－2 他	点　在			貝ブロック			茅山上層・黒浜・諸磯a・b・浮島・興津・加EⅡ・Ⅲ・加BⅡ・千網・大洞A′	⑭
大膳野南	大金沢町オケラ台	馬蹄形						諸磯・加E・堀・加B	②⑦
杉ノ台	中西町中西台	点　在						加B	②
草刈	市原市 草刈字下切付 他	馬蹄形						早期・前期・勝坂・阿玉台・中峠・大木8a・曽利・加EⅠ・Ⅱ・Ⅲ	⑮
西鹿ノ原	番場字鹿ノ原	地　点						阿玉台・加E	④
多竜台	喜多字多竜台695 他	馬蹄形						加E・堀・加B・安Ⅰ	④
福寿院	菊間字深道	地　点						縄文	②
北野谷	菊間北野谷貝塚台	地　点						縄文	②
小幡神社	菊間字雲ノ境	地　点						縄文	②
徳永	菊間字徳永	地　点						縄文	②
辰己台	大厩字辰己原 他	点　在				?		堀？	②⑦
門前	門前1116 他	馬蹄形						加E・堀・加B	④

手　　永	菊間字手永2137他	馬　蹄　形				―		堀・加B・安	④⑯⑰

主要文献

① 千葉市教育委員会『千葉市史史料篇』Ⅰ．昭和51年
② 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2) 昭和61年
③ 千葉県文化財センター「南二重堀遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』）12.　昭和58年
④ 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
⑤ 上守秀明・小宮孟「千葉県千葉市有吉北貝塚の調査」（『日本考古学協会第53回総合研究発表要旨』）昭和62年
⑥ 千葉県文化財センター「馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』）15．昭和59年
⑦ 伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年
⑧ 千葉県文化財センター「木戸作遺跡」（『千葉県東南部ニュータウン』）２・７．昭和50・54年
⑨ 千葉県文化財センター『千葉市浜野川遺跡群』昭和63年　金丸誠・麻生正信・服部哲則「低湿地遺跡の水浸木質遺物の取り上げ」（千葉県文化財センター『研究連絡誌』20．昭和62年・寺門義範「神門遺跡の調査」（千葉市文化財調査協会『浜野川神門遺跡現地説明会資料』）昭和63年・寺門義範「千葉市神門遺跡の調査」（加曽利貝塚博物館『東京湾東沿岸の早・前期貝塚』）昭和64年
⑩ 千葉県文化財センター「小金沢貝塚」（『千葉県東南部ニュータウン』）10．昭和57年
⑪ 千葉県文化財センター「六通貝塚貝層範囲確認調査」（『研究連絡誌』）18．昭和61年
⑫ 千葉県文化財センター「六通金山遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』）11．昭和56年
⑬ 学習院高等科史学部『千葉県誉田高田貝塚発掘概報』昭和30年
⑭ 千葉県文化財センター「大膳野北遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』）16．昭和60年
⑮ 千葉県文化財センター「草刈遺跡確認調査の概要」（『千原台ニュータウン』）1.　昭和55年・千葉県文化財センター「草刈遺跡Ｂ区」（『千原台ニュータウン』）Ⅲ．昭和61年
⑯ 市原市文化財研究協議会『市原市遺跡分布図』昭和46年
⑰ 鷹野光行「市原市菊間手永貝塚採集の土器片」（『伊知波良』）3.　昭和55年

要を記するにとどめ、いずれ項を改めて私見を述べるつもりである。

神門貝塚は、その北側にある標高10 m前後の洪積世台地から南へ約 300 mほどはなれた水田面下にある。地形は台地の裾部から本貝塚の方向へゆるやかに傾斜する。千葉市文化財調査協会が行なったボーリング調査によると、貝塚の位置は、台地の裾から南東方に突き出た砂州の内側にあって、貝層の分布範囲は南に狭く北方に広がった不整三角状を呈し、総面積は約500 ㎡と推定される。このうち、千葉県文化財センターが調査した部分は南端部約35 ㎡、千葉市文化財調査協会はこれに隣接する北側部分215 ㎡であるから、残りの約半分は未調査地区となる。

水田面の標高は、県文化財センターの部分で6.60 m、千葉市文化財調査協の部分で6.70 m を測る。この地下を 2.10 ～ 1.70 mほど掘り下げると上部貝層の上面が現れる。両調査区内に於ける貝層の最大東西幅は29 m、南北幅は15 mで、貝層は東西の方向にレンズ状に堆積する。貝層の厚さは北側の中央部で 2.1 mである。下部貝層は千葉県文化財センターの部分には存在せず、千葉市文化財調査協会の部分から未調査区域の部分にわたるものと推測される。千葉市文化財調査協会の部分では東西幅24 m、南北幅 8 mである。貝層の厚さは10～20㎝の層と10㎝あまりの層との 2 枚からなり、この貝層の上部・下部および周辺部では植物痕や水流などによる撹乱がみられる。下部貝層の低面は標高 2.10 mを測り、その下にうすい緑灰色シルト質細粒砂層があって、その下に砂層がある。

上部・下部貝層の組成はいずれもハマグリを主とし、ハイガイ・マガキ・アカニシなどで構成され、純貝層も認められるが、全体的には混貝砂層ないしは混砂貝層からなり、その多くは

表6.

標　　高	千葉市文化財調査協会	千葉県文化財センター	時　　代
地 表 面（水田面）	6.70 m	6.60 m	現 代
			弥 生 ・ 古 墳 古 代 ・ 中 世
上 部 貝 層 上 面 上 部 貝 層 底 面	5.00 m 2.90 m	4.50～3.90 m 3.50～3.40 m	縄 文 前 期
シ ル ト 層	2.60 m	?	
下 部 貝 層 上 面 下 部 貝 層 底 面	2.40 m 2.10 m		縄 文 早 期 後 半
緑 灰 色 シ ル ト 質 細 粒 砂 層			
砂　　層			

破砕の極度に進んだ貝層である。貝層中には、炭化物・灰・熱を受けた貝殻を含む層もあり、おおむね水平に堆積する。貝層中からはイノシシ・ニホンジカ等の獣骨やマダイ・クロダイ・イナダ・サバ類・コチ・ヒラメ・スズキ・サメなどの魚骨が少なからず出土する。特に上部貝層中からはイルカ一頭分の解体骨と思われるものも発見された。このほか土器・石器・流木・植物遺体（ドングリ・クルミ・ヒョウタン）・木製品・植物製品などがある。貝層中の土器は下部貝層に鵜ケ島台・茅山式が含まれ、上部貝層に花積下層・関山Ⅰ・Ⅱ・黒浜・浮島Ⅰ・諸磯a・b・c・十三菩提・興津式が含まれる。

遺構は集石跡と集石炉跡である。このうち集石跡は、下部貝層に伴なう砂州上にあるもの3基、上部貝層に伴なう砂州上にあるもの45基、上部貝層中にあるもの1基である。集石炉跡は上部貝層に伴なう砂州上にあるもの1基、上部貝層中にあるもの3基である。もっとも、『千葉県文化財センター年報』12に報告された集石群22基の中には「屋外炉の可能性が強い」ものがある由であるから、実際の基数はかなり変動があるものと思われる。

いずれにしても、神門貝塚の発掘調査によって、早期後半から前期の時代の海岸線がこの砂州のすぐ近くにあったことが明確に立証された。そしてこの時代の周辺の海の自然環境は、ハマグリ・ハイガイ・マガキなどが多く生息する淡水の流入する砂泥底の内湾であった。この周辺に集まった人々は、この砂州や時には彼等が捨てた塵介の上で、捕獲・採集した獣類や魚貝類を調理するために、海辺に打ちあげられた小石を集めて加熱し、頻繁に蒸し焼き（石蒸し調理法）にしていたのである。

註1　千葉市教育委員会『千葉市史近世近代篇』昭和49年

註2　千葉県文化財センター「南二重堀遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』）12　昭和58年

註3　上守秀明「遺構内堆積貝塚のもつ意味について」（千葉県文化財センター『研究連絡誌』15　昭和61年・上守秀明・小宮孟「千葉県千葉市有吉北貝塚の調査」（『日本考古学協会第53回総会・研究発表要旨』）昭和62年

註4　『房総里見軍記』巻13・千葉県文化財センター「馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』）15，昭和59年

註5　千葉県文化財センター「木戸作遺跡（第2次）」（『千葉東南部ニュータウン』）7　昭和54年・小宮孟「貝塚産魚貝類の解析と課題 ― 千葉市木戸作貝塚の資料を中心として」（千葉県文化財センター『研究紀要』6　昭和56年

神門貝塚の集石跡と集石炉跡

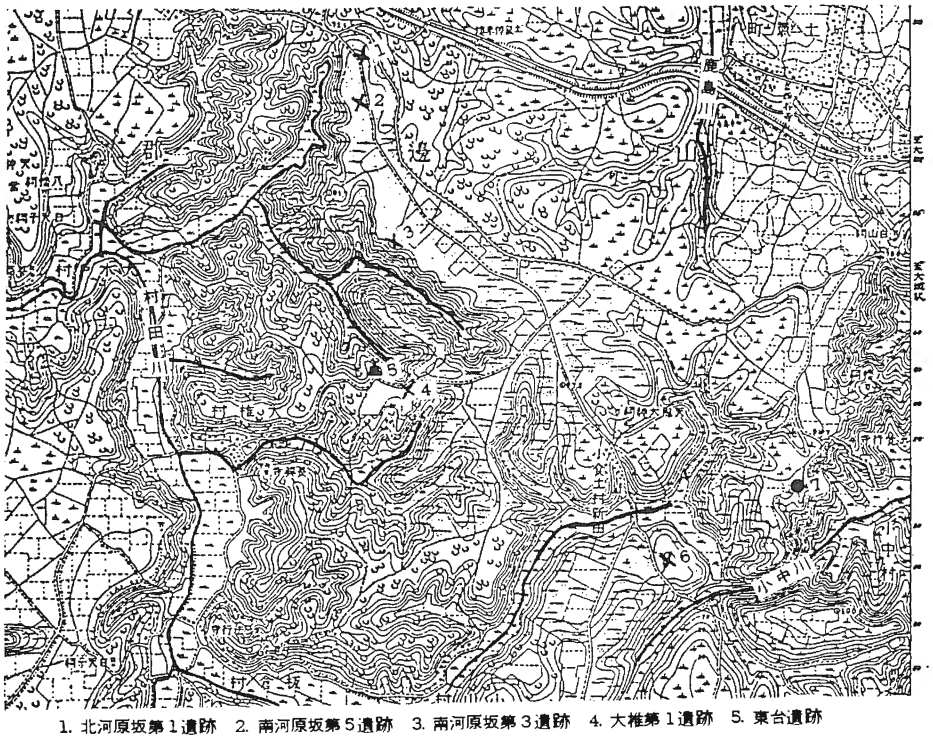
名称	場所	基数	規模	構成・特徴	時期	資料
集石跡	上部貝層外	22	小型	構成礫は小さい炭化物を伴うものがある。炉址の可能性あり	黒浜～諸磯式	『千葉県文化財センター年報』12. 昭和62年
	下部貝層外	1	180×120 cm	焼石105. 土器2. 炭	条痕文	
	〃	1	120× 40	焼石22	〃	
	〃	1	150× 70	焼石20. 土器1	〃	
	上部貝層外	1	100× 70	焼石115	花積下層式	
	〃	1	60× 40	焼石10. 骨2. 種子	〃	
	〃	1	170×120	焼石7. 土器31. 材4. 種子10. 骨28	〃	
	〃	1	200×150	焼石67. 土器4. 炭	〃	
	〃	1	150× 60(+)	焼石48、種子2、炭	黒浜式	
	〃	1	80× 60	焼石51. 土器1	花積下層式	
	〃	1	120× 60	焼石40、炭	〃	
	〃	1	80× 40	焼石33、材1、種子2、炭	〃	
	〃	1	100× 50	焼石23	〃	
	〃	1	70× 50	焼石5、種子6	黒浜式	
	〃	1	60× 60	焼石38. 土器1、炭	花積下層式	
	上部貝層中	1	130× 60	焼石390 土器1	黒浜式	
	上部貝層外	1	200×200	焼石55. 土器2、種子5. 炭	花積下層式	
	〃	1	90× 80	焼石93. 土器1、種子4	黒浜式	
	〃	1	90× 90	焼石149. 材1、 炭	〃	
	〃	1	50× 30	焼石7	〃	
	〃	1	110× 70	焼石39. 土器1	〃	
	〃	1	75× 55	焼石93. 炭3	〃	
	〃	1	35× 30	焼石71. 土器1. 炭8	関山Ⅱ式	
	〃	1	80× 50	焼石49. 骨	黒浜式	
	〃	1	55×40× 5	焼石23. 土器	前期末	寺門義範「千葉市神門遺跡の調査」（加曽利貝塚塚博物館『東京湾沿岸の早・前期貝塚』）昭和64年
集石炉跡	上部貝層中	1	70×45× 7	焼石51. 灰	花積下層式	
	〃	1	70×20× 6	焼石17. 灰	〃	
	〃	1	90×90×10	焼石148. 灰	浮島Ⅰ式	
	上部貝層外	1	80× 80	焼石75. 骨1. 灰	花積下層式	

註　貝層外＝砂州

(9) 村田川沿岸

村田川は、千葉県長生郡長柄町味庄の標高約130 *m*付近に源を発し、しばらく北流して、千葉市大木戸付近から西に方向を転じ、千葉・市原両市の境を通して東京湾に注ぐ、延長約22キロである。この河の本支流沿岸の台地に分布する縄文時代の貝塚は11ケ所、貝ブロックを包含する遺跡は3ケ所で、このうち貝ブロック遺跡の1ケ所のみが、上流地域の一画にある千葉市大椎町東台に発見されている。

東台遺跡は、このあたり周辺約300ヘクタールに「あすみが丘」と称する住宅団地の造成に伴なう遺跡の調査によって判明した。遺跡の位置は大木戸から東南に侵入する村田川の支流の南岸に面する標高86.05～88.70 *m*の台地である。いまだ発掘報告書に接しないが、周辺一帯と隣接する「昭和の森」公園にかけての遺跡群を記載した発掘報告によると、このあたりには早期前半から前期にかけての遺跡が濃厚に分布する。特に関山式期には数ケ所にかなりの集落が存在していた。このことは「昭和の森」公園内にある関山式期の辰ケ台貝塚の周辺に、同時期の大型住居址1軒を含む12軒・住吉遺跡の1軒・東台遺跡の12軒などの発見によって実証される。ただ、辰ケ台の立地は、九十九里海岸に注ぐ南白亀川の支流小中川の水源近くにあり、住吉は村田川と小中川の分水点付近にある点が東台とは異るが、両遺跡と東台の距離は約2キロ前後にすぎない。しかも辰ケ台貝塚の貝類と東台の遺構中に入っていたと伝聞する貝類に外



1. 北河原坂第1遺跡　2. 南河原坂第5遺跡　3. 南河原坂第3遺跡　4. 大椎第1遺跡　5. 東台遺跡
6. 辰ケ台貝塚　7. 住吉遺跡

第8図　村田川上流地域における関山式期遺跡の分布

東台遺跡周辺の縄文遺跡

遺跡名	所在地	採集土器	備考	文献
東台	千葉市大椎町	茅山・花積下層・関山	貝ブロック 関山式期住居址	①
辰ヶ台	千葉市小食土町	花積下層・関山・加E	貝塚 関山式期住居址	②③
北河原坂第2	〃	田戸下層・茅山・関山		①
南河原坂第1	〃	三戸・茅山・関山		①
南河原坂第5	〃	三戸・関山・黒浜・諸磯a・b・浮島Ⅲ・興津・下小野	三戸式期住居址 前期住居址	①
坂ノ越	〃	三戸・野島・茅山		①
文六第1	千葉市大椎町	稲荷台・三戸・鵜ケ島台・茅山・諸磯・浮島・加E		①
文六第2	〃	井草・野島・三戸・鵜ケ島台・茅山・諸磯・浮島・阿玉台		①
大椎第2	〃	田戸下層・茅山・関山		①
住吉	千葉市小食土町	井草・夏島・田戸下層・田戸上層・茅山下層・茅山上層・花積下層・関山・浮島・加E・堀之内	関山式期住居址	③
文献	① 千葉市土気地区遺跡調査会『千葉市土気地区埋蔵文化財調査報告』Ⅰ．昭和55年 ② 川戸彰『辰ケ台貝塚発掘報告』昭和40年 ③ 千葉市文化財調査協会『千葉市辰ケ台・住吉・東住吉遺跡』平成元年			

No. 通しNo.	No. 市町村別	県埋文分布地図No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
156	24	41−1244	愛生	愛生町			▬	—		加曽利EⅡ・加曽利EⅢ・称名寺
157	25	41−188	餅ケ崎	源町297他	—		▬	—		井草Ⅰ・Ⅱ・夏島・稲荷台・田戸下層・鵜ケ島台・茅山・中峠・曽利・加曽利EⅡ・Ⅳ・称名寺・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ
158	26	41−194	殿台	殿台町298他		—		▬	—	黒浜・加曽利E・加曽利BⅠ・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa
159	27		西寺山	源町西寺山			▬	—		加曽利E・堀之内
160	28	41−200	北前原	源町源小字北前原	—		▬	—		井草・加曽利E・称名寺
161	29	41−189	すすき山	源町すすき山	—		▬	—		茅山・加曽利EⅢ・堀之内
162	30		殿台前	殿台町殿台向			—	▬		加曽利E・堀之内・加曽利B
163	31	41−264	東寺山	東寺山町宮街道・本郷			▬	—		阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ
164	32	41−247	東寺山南(稲毛台東)	東寺山町稲毛台			▬			阿玉台・加曽利E
165	33	41−205	廿五里北	源町851他			▬	—		加曽利EⅡ・Ⅲ・堀之内Ⅰ加曽利B・安行
166	34	41−290	廿五里南(廿五里)	源町廿五里840−1			▬	▬		阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・堀之内・加曽利B
167	35	41−294	北原	高品町北原	—	—		▬		茅山・浮島・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ
168	36	41−244	宮腰(高品第1)	高品町宮腰		▬	—			浮島・加曽利E
169	37	41−350	貝堤(東田)	高品町90他	—	▬	—	—		茅山・諸磯a・b・c・浮島ⅠⅡ・Ⅲ・興津・阿玉台・加曽利E・加曽利B・安行Ⅰ
170	38	41−273	草刈場	貝塚町木戸作		—	▬	▬	?▬	加曽利E・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲc黒浜・浮島・下小野・阿玉台・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ
171	39	41−275	向ノ内(草刈場南)	貝塚町向ノ内・尻籠		—	▬	▬	—	阿玉台・加曽利E・加曽利B・諸磯a・浮島・堀之内Ⅰ・Ⅱ・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

（太線は貝層・貝ブロックの形成時期）

規　模	備　考	主　要　文　献
地　点	消　滅	昭和57年加曽利貝塚博物館調査
貝ブロック 点　在	発　掘 消　滅	千葉市教育委員会『千葉市源町餅ケ崎遺跡発掘調査予報』昭和55年 横田正美「柄鏡形住居址とその遺物について ― 千葉市源町餅ケ崎遺跡」（『加曽利貝塚博物館紀要』）9. 昭和58年
馬　蹄　形	一部消滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編Ⅰ』昭和51年 阿部芳郎「千葉市殿台町殿台貝塚出土の遺物について」（『貝塚博物館紀要』8） 昭和57年
地　点	消　滅	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年 千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ 昭和51年
貝ブロック 地　点	消　滅	（『貝塚博物館紀要』）5 すすき山遺跡の報告の第1表にある。
点在貝ブロック 馬　蹄　形	完　掘 消　滅	後藤和民・庄司克「千葉市源町すすき山遺跡発掘調査概報」（『貝塚博物館紀要』）5 昭和47年　横田正美「縄文時代中期末期における文化様相」（『貝塚博物館紀要』）8 昭和57年
点　在	消　滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ昭和51年
馬　蹄　形	保存・発掘 半　壊	東寺山遺跡群発掘調査会『千葉市東寺山遺跡群発掘調査報告書』昭和45年 千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ昭和51年
点　在	半　壊	千葉県文化財センター『昭和56年度発掘された遺跡展－千葉市東寺山遺跡』昭和56年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
馬　蹄　形	発　掘 一部消滅	千葉県教育庁文化課『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』昭和58年
馬　蹄　形	発　掘 半　壊	日本考古学協会『日本考古学年報』24 昭和48年 千葉県教育庁文化課『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』昭和58年
点　在	消　滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ昭和51年
点　在	消　滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ 昭和51年
地　点		千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ 昭和51年 寺門義範「千葉市東田遺跡出土の資料を礎にして」（『貝塚博物館紀要』）12 昭和60年
馬　蹄　形	保存・発掘 半　壊	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年 宍倉昭一郎「貝塚町貝塚群の現状とその歴史的意義」（日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会『貝塚町貝塚群と原始集落』昭和51年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚」昭和58年
点　在	半　壊	柿沼修平ほか「草刈場貝塚南側付近採集の遺物について」（『ふさ』2）昭和47年 宍倉昭一郎「貝塚町貝塚群の現状とその歴史的意義」（日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会『貝塚町貝塚群と原始集落』昭和51年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年

No. 通し No.	No. 市町村別	県埋文分布地図 No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
172	40	41−355	荒屋敷西	貝塚町貝塚向		▬	▬	▬		関山・浮島・興津・諸磯a・b・黒浜・加曽利E・安行Ⅱ
173	41		西光院（干場）	貝塚町花辺田			▬	▬		阿玉台・加曽利E・加曽利B
174	42	41−274	貝殻後	貝塚町貝殻後			▬	▬		阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・加曽利B
175	43	41−346	東辺田（荒屋敷北）	貝塚町東辺田	▬	▬	▬	▬		夏島・黒浜・浮島・阿玉台・加曽利EⅣ・称名寺・堀之内Ⅰ・加曽利B・安行Ⅰ・安行Ⅱ
176	44	41−349	荒屋敷	貝塚町畑中		▬	▬	▬		黒浜・諸磯a・浮島・五領ケ台・阿玉台・勝坂・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・称名寺・堀之内・加曽利B・安行
177	45	41−348	台門	貝塚町台門・殿作		▬	▬	▬	?▬	阿玉台・加曽利E・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅲa・Ⅲb・黒浜・五領ケ台・称名寺
178	46	41−347	姥ケ作	貝塚町姥ケ作			▬	▬		阿玉台・加曽利EⅢ・Ⅳ・堀之内
179	47	41−371	車坂	貝塚町1351他		▬	▬	▬		諸磯・浮島・阿玉台・加曽利E・称名寺・加曽利B
181	49	41−365	木戸場	都町1丁目47他	▬	▬				夏島・浮島・諸磯a・b
182	50	41−676	野呂山田	野呂町山田669−1−2			▬	▬	▬	加曽利EⅢ・堀之内・加曽利BⅠ・Ⅱ・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb
183	51	41−632	多部田	多部田町貝殻作				▬		堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠⅡ・Ⅲ・安行Ⅰ・Ⅱ
185	53		北谷津（上の台）	北谷津町上ノ台			▬	▬		阿玉台・加曽利E・堀の内
186	54	41−301	中薙	小倉町861−9他			▬			加曽利EⅢ・Ⅳ
187	55	41−417	蕨立	千城台西町蕨立			▬	▬		阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・堀之内

規　模	備　考	主　要　文　献
点　在	半　壊	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年 宍倉昭一郎「貝塚町貝塚群の現状とその歴史的意義」（日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会『貝塚町貝塚群と集落』）昭和51年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
点　在		千葉市立高校社会研究クラブ『葭川流域遺跡分布調査概報』昭和46年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
点　在	発　掘 一部残存	千葉県文化財センター『千葉市荒屋敷貝塚』昭和53年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
点　在	発　掘 一部残存	宍倉昭一郎「貝塚町貝塚群の現状とその歴史的意義」（日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会『貝塚町貝塚群と原始集落』昭和51年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年 千葉県文化財センター『千葉市荒屋敷北貝塚・谷津上・須摩堀遺跡』昭和61年
馬蹄形	発掘・保存 一部消滅	千葉県都市公社『千葉市荒屋敷貝塚』昭和49年 千葉県文化財センター『千葉市荒屋敷貝塚』51年 千葉県文化財センター『千葉市荒屋敷貝塚』昭和53年
馬蹄形	発　掘 消　滅	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年 日暮晃一『千葉市貝塚町貝塚群の研究予報』昭和57年
点　在	一部消滅	千葉市立高校社会研究クラブ『葭川流域遺跡分布調査概報』昭和46年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
点　在 貝ブロック	発　掘 消　滅	千葉県都市公社『京葉』昭和48年
点　在	一部残存	千葉市『千葉市誌』昭和28年 千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年
点　在	発　掘	川戸彰「野呂山田貝塚」（千葉県教育委員会『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』）昭和36年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
馬蹄形	発　掘	前田潮「千葉県多部田貝塚出土動物遺体」（『大塚考古』5）昭和39年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年 昭和29年東京教育大学発掘
点　在	一部残存	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ昭和51年
貝ブロック 点　在	発　掘 一部残存	千葉県文化財センター『千葉市中薙遺跡』昭和61年
点在馬蹄形	発　掘 消　滅	武田宗久「千葉県千葉市蕨立貝塚」（『日本考古学年報』4）昭和30年 千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ昭和51年

No. 通し No.	No. 市町村団	県埋文分布地図 No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
188	56	41−400	さら坊	千城台西さら坊			▬	—		阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・堀之内・加曽利B
187	57	41−376	台（坂月台）	坂月町170			—	▬		加曽利E・堀之内・加曽利B
190	58	41−309	広ケ作	小倉町1756他			▬	—		加曽利EⅢ・加曽利BⅠ
191	59	41−300	滑橋	小倉町谷頭			▬	—		加曽利EⅡ・Ⅲ・堀之内Ⅰ
192	60	41−299	加曽利	桜木町京願台	—	—	▬	▬	?▬	茅山・関山・黒浜・五領ケ台・阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb・姥山台Ⅲ・大洞BC・CⅠ
193	61		加曽利西	桜木町京願台				▬		堀之内Ⅰ
194	62	41−359	花輪	加曽利町1020〜1030			—	▬		加曽利E・堀之内
195	63	41−354	向ノ台	都町向ノ台	▬	—				田戸上層・子母口・茅山・諸磯
196	64	41−343	西ノ下通（宝導寺台）	都町西ノ下通676他		▬	—			関山・黒浜・諸磯a・b・c 浮島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・下小野・五領ケ台
197	65	41−504	滝ノ谷（大久保）	大宮町3065−3		—	▬	▬		黒浜・諸磯・阿玉台・加曽利E・堀之内・加曽利B
198	66	41−506	押元	大宮町3763他			▬	▬		加曽利E・堀之内・加曽利B
199	67	41−879	水砂（東水砂第2）	平山町南水砂・東水砂			▬	—		加曽利EⅢ・Ⅳ・堀之内・加曽利B
200	68	47−898	長谷部（主理台）	千葉市平山町主理台			▬	▬		阿玉台・加曽利E・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ
201	69	47−756	築地台	平山町築地台			▬	▬		加曽利EⅢ・Ⅳ・称名寺・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb・前浦・姥山台・大洞B−C・荒海
202	70	47−739	吾妻	平山町吾妻61		—	▬	▬		阿玉台・加曽利E・堀之内Ⅰ・加曽利B・諸磯

規　模	備　考	主　要　文　献
点　在	発　掘 消　滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ 昭和51年
点　在	一部消滅	千葉市『千葉市誌』昭和28年 千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年
点　在	発　掘 一部消滅	山武郡考古学研究所『広ケ作遺跡調査報告』昭和59年
点在馬蹄形	発掘・保存 一部消滅	『千葉市史史料編』Ⅰ・昭和51年 昭和56年　山武郡考古学研究所調査
環状・馬蹄形	発掘・保存 一部消滅	大山史前学研究所「千葉県千葉郡都村加曽利貝塚調査報告」（『史前学雑誌』9－1）昭和12年 『加曽利貝塚』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（貝塚博物館調査資料1.2.3.4集）昭和42・43・45・46年 後藤和民・庄司克・飯塚博和「加曽利貝塚東傾斜面調査概報」(『貝塚博物館紀要』6.7.8号）昭和56・57年
点　在		千葉市立加曽利貝塚博物館『加曽利貝塚博物館20年の歩み』昭和62年
馬蹄形	一部消滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
地　点	発　掘 消　滅	「千葉市都町字向ノ台貝塚の発掘に就いて」（千葉県立千葉中学校々友会『かつらぎ』復刊号）昭和22年　千葉市『千葉市誌』昭和28年
地　点	標高7～8m発掘 一部残存	庄司克「宝導寺台貝塚発掘調査概報」（加曽利貝塚博物館『貝塚博物館紀要』3）昭和45年 寺門義範「縄文時代前期後半から中期初頭にかけてのー資料」（『貝塚博物館紀要』11）昭和59年
点　在	一部消滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ 昭和51年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』2　昭和61年
点　在	一部消滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
点　在		千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年 千葉市教育委員会『千葉市埋蔵文化財分布地図』昭和59年
馬蹄形	発　掘 保　存 一部残存	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
点在馬蹄形	発　掘 一部消滅	久保常晴「千葉県千葉郡築地台貝塚」(『日本考古学年報』2.3）昭和24・25年 千葉県文化財センター『千葉市築地台貝塚・平山古墳』昭和53年
点　在	一部消滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年

No. 通しNo.	No. 市町村別	県埋文分布地図No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
203	71	47−737	台畑	平山町台畑			▬	▬		阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・安行Ⅰ・堀之内・加曽利B
204	72	47−992	六通	大金沢町字六通				▬	?▬	堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲc
205	73	47−1027	野田(野田小谷)	誉田町一丁目小谷・一里塚南			▬	▬		阿玉台・加曽利EⅢ・加曽利B
206	74	47−742	立堀	辺田町雲中				▬		堀之内・加曽利B
207	75	47−735	菱名	平山町菱名			▬			阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ
208	76	41−596	へたの台	仁戸名町270〜280			▬			阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ
209	77	41−597	月ノ木	仁戸名町月ノ木						加曽利E・堀之内・加曽利B
210	78	41−493	高崎台	星久喜町800〜814他				▬		堀之内
212	80	41−475	矢作	矢作町貝殻	—	—	—	▬	—	茅山・諸磯・加曽利E・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa
213	81	41−482	亥鼻	亥鼻町1−6−1				▬		堀之内Ⅰ・加曽利B
214	82	41−583	稲荷山	千葉寺町稲荷山	—	▬				茅山・諸磯
215	83		雉ノ宮	赤井町向台538〜540				▬		堀之内
216	84	47−606	オクマンノ	宮崎町奥万野台北640	▬					茅山
217	85	47−734	狐塚	今井町146字番匠免				▬		堀之内・加曽利B
218	86		大覚寺山脇	生実町大覚寺脇				▬		堀之内・加曽利B
219	87	47−987	森台(南生実台)	南生実町南生実台973	—			▬		鵜ケ島台・茅山・堀之内・加曽利B
220	88	47−867	鎌取場台	鎌取町鎌取場台				▬		堀之内・加曽利B
221	89	47−874	南二重堀	生実町2857−1他	—	—	—	▬	—	稲荷台・黒浜・浮島・阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・堀之内
222	90	47−857	上赤塚	南生実町上赤塚	—		—	▬		茅山・加曽利E・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ

規　模	備　考	主　要　文　献
点　在		千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
馬蹄形	保　存 標高40～47m	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年 千葉県文化財センター「六通貝塚貝層範囲確認調査」『研究連絡誌』18号　昭和61年 「千葉県文化財センター年報」11　昭和61年
点　在	消　滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年 千葉市教育委員会『千葉市埋蔵文化財分布地図』昭和59年
地　点		（な　し）
点在馬蹄形	発　掘 半　壊	後藤和民・庄司克「千葉市平山町菱名貝塚調査概報」（千葉市加曽利貝塚博物館『貝塚博物館紀要』２）　昭和44年
点在馬蹄形	一部消滅	千葉市『千葉市誌』　昭和28年
馬蹄形	発掘・保存	千葉市『千葉市誌』　昭和28年
点　在	一部消滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
馬蹄形	発　掘 消　滅	武田宗久「下総国矢作貝塚発掘報告」（『考古学』９の８　昭和13年 千葉県文化財センター『千葉市矢作貝塚』　昭和56年
地　点	一部残存	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
点　在	消　滅	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年
点　在	消　滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
点　在	一部残存	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年
地　点	消　滅	武田宗久「千葉市今井町狐塚古墳」（千葉県教育委員会『千葉県遺跡調査報告』）　昭和40年 千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年
地　点	消　滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』　昭和51年 千葉市文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
馬蹄形	一部消滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
点　在		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
貝ブロック点　在	発　掘	千葉県文化財センター「南二重堀遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』12）昭和58年
馬蹄形	保　存	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』２　昭和61年

No. 通し No.	No. 市町村別	県埋文分布地図 No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
223	91	47−865	有吉北（日照田）	有吉町730他	—		■	—		茅山・中峠・阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・称名寺・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ
224	92	47−873	大井戸作	有吉町駒見台 大井戸作			—	■		加曽利E・堀之内・加曽利B
225	93	47−1226	神門	南生実町神門740他	■	■			—	鵜ケ島台・茅山・花積下層 関山Ⅰ・Ⅱ・黒浜・諸磯a b・浮島Ⅰ・十三菩提・荒海
226	94	47−871	有吉南（有吉宮前・有吉）	有吉町481他			■?	■		加曽利EⅠ・Ⅱ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利B
227	95	47−875	有吉城跡	有吉町有吉城址	■?					茅山上層
228	96	47−1012	小金沢（堂面）	小金沢町929−4他	—	—	—	■		茅山・黒浜・加曽利EⅣ・堀之内Ⅰ・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ
229	97	47−995	木戸作（椎名崎）	椎名崎町859他			—	■		加曽利E・称名寺・堀之内Ⅰ・加曽利B
230	98	47−1023	六通金山	大金沢町480他	—		■			茅山・加曽利EⅢ・Ⅳ
231	99	47−1022	大膳野北	大金沢町543−2他	—	—	■	—	—	茅山上層・黒浜・諸磯a・b・浮島・興津・阿玉台・加曽利EⅡ・Ⅲ・加曽利BⅡ・千網・大洞A′
232	100	47−1080	大膳野南（長堀）	大金沢町オケラ台		—	—	■		諸磯・加曽利E・堀之内・加曽利B
233	101	47−1077	杉ノ台	中西町中西宮山				■		加曽利B
234	102	48−802	中野僧御堂	中野町1224他	—		■	—		茅山・加曽利EⅢ・Ⅳ・称名寺・堀之内・加曽利B
235	103	47−789	八反目台（百万本）	野呂町八反目台	—		—	■	—	夏島・加曽利EⅢ・称名寺堀之内Ⅰ・加曽利BⅠ・ⅡⅢ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲc・姥山台Ⅱ・Ⅲ
236	104	47−785	宮ノ台	野呂町宮ノ台			—	■		加曽利E・堀之内Ⅰ・加曽利B・安行Ⅰ

規　模	備　考	主　要　文　献
点在馬蹄形	発　掘 半　壊	上守秀明・小宮孟「千葉県千葉市有吉北貝塚の調査」（『日本考古学協会第53回総会研究発表要旨』）　昭和62年
点　在	消　滅	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年
地　点	発　掘 標高6.5 m 約1/2残存	金丸誠・麻生正信・服部哲則「低湿地遺跡の水浸木質遺物の取り上げ」（千葉県文化財センター『研究連絡誌』20号）　昭和62年 千葉県文化財センター『千葉市浜野川遺跡群』　昭和63年 寺門義範「神門遺跡の調査」（千葉市文化財調査協会『浜野川神門遺跡現地説明会資料』）　昭和63年
馬蹄形	保　存 一部消滅	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
貝ブロック 点　在	発　掘	千葉県文化財センター「馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』15）　昭和59年
点在馬蹄形	完　掘 消　滅	千葉県文化財センター「小金沢貝塚」（『千葉東南部ニュータウン』10） 昭和57年
点在馬蹄形	完　掘 消　滅	千葉県文化財センター「木戸作遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』2・7） 昭和50・54年
貝ブロック 点　在	発　掘	千葉県文化財センター「六通金山遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』11） 昭和56年
貝ブロック 点　在	発　掘	千葉県文化財センター『千葉市大膳野北遺跡』　昭和57年 千葉県文化財センター「大膳野北遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』16） 昭和60年
点在馬蹄形	保　存	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
地　点	消　滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
貝ブロック 点　在	発　掘 消　滅	千葉県文化財センター『千葉市僧御堂遺跡』　昭和52年
点在馬蹄形		田中英世「千葉市八反目貝塚」（千葉市加曽利貝塚博物館『貝塚博物館紀要』11）　昭和59年
貝ブロック 点　在	消　滅	千葉市遺跡調査会『駒込遺跡』昭和58年8月の遺跡の概観に記載 田中英世「千葉市八反目台貝塚」（『加曽利貝塚博物館紀要』）11　昭和59年

No. 通し No.	No. 市町村別	県埋文分布地図 No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
237	105	47−906	誉田高田	高田町字冬寒台 中芝・貝塚			—	■		加曽利E・堀之内・加曽利B・安行1・Ⅱ
238	106	47−658	川井（道ノ下）	川井町字川井400	—		—	■	—	早期前半・加曽利E・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa
239	107	41−404	荒立	千城台4丁目 荒立外山			■	■	—	阿玉台・加曽利E・堀之内 加曽利B・安行Ⅲa
301	109	41−277	新堀込南（草刈場北）	貝塚町新堀込				■	—	称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa
302	110	41−276	草刈場東（谷ツ上）	貝塚町谷ツ上			■	■		加曽利E・称名寺・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ
303	111	41−580	鷲谷津	千葉寺町鷲谷津				■		堀之内・加曽利B
304	112	41−524	うならすず	多部田町うならすず				■		後期
305	113		東台	大椎町東台1009〜東要772−1	—	■				茅山・花積下層・関山
306	114	47−1028	大膳野北	大膳野町大膳野			—	■		加曽利E・堀之内・加曽利B

四街道市

No. 通し No.	No. 市町村図	県埋文分布地図 No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
240	1	41−74	中三角（和良比向井）	四街道市四街道中三角1577他						井草・夏島・茅山・黒浜・浮島・加曽利E・加曽利B

規　模	備　考	主　要　文　献
馬蹄形	発　掘 標高　48m	学習院高等科史学部『千葉県誉田高田貝塚発掘概報』　昭和30年
点　在	一部残存	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年 千葉市教育委員会『千葉市埋蔵文化財分布地図改訂版附編』　昭和59年
点　在	消　滅	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
点　在		日暮晃一『千葉市貝塚町貝塚群の研究予報』　昭和57年
点　在		宍倉昭一郎『貝塚町貝塚群の現状とその歴史的意義』日本考古学協会『貝塚町貝塚群と原始集落』　昭和51年 日暮晃一『千葉市貝塚町貝塚群の研究予報』　昭和57年
点　在		千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年 昭和44年加曽利貝塚博物館確認
貝ブロック	消　滅	千葉市教育委員会「ヲフウデン遺跡発掘調査報告」（『千葉市文化財調査報告第１集』）　昭和51年に記載
貝ブロック 点　在	発　掘 消　滅	千葉市土気地区遺跡調査会『千葉市土気地区埋蔵文化財調査報告』　昭和55年
点　在		伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』12　昭和61年

規　模	備　考	主　要　文　献
点　在	消　滅	四街道市教育委員会『千葉県四街道市埋蔵文化財分布地図』　昭和57年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年

市　原　市

No. 通しNo.	No. 市町村別	県埋文分布地図No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
241	1	47−649	西鹿ノ原	番場・鹿ノ原			■			阿玉台・加曽利E
242	2	47−686 10−1	草　刈 (下切付・扇ケ谷)	草刈字下切付他	—	—	■			早期・前期・勝坂・阿玉台曽利・大木8a・中峠・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ
243	3	47−643	多竜台	喜多字多竜台 695他			—	■		加曽利E・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ
244	4	47−599	手　永	菊間字手永 2137他				■		堀之内・加曽利B・安行
245	5	47−575	門　前	門前2−211 他			—	■		加曽利E・堀之内・加曽利B
307	6	47−598	福寿院	菊間字深道						縄文
308	7	47−602	北野谷	菊間字北野谷小字貝塚台						縄文
309	8	47−596	小幡神社	菊間字雲ノ境						縄文
310	9	47−597	徳　永	菊間字徳永						縄文
311	10		辰巳台	大厩字辰巳原他						縄文

規　模	備　考	主　要　文　献
地　点		千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
点在馬蹄形	発掘調査継続中	千葉県文化財センター「草刈遺跡確認調査の概要」（『千原台ニュータウン』1）昭和55年 千葉県文化財センター「千葉急行線」（『千葉県文化財センター年報』No.8）昭和58年 市原市文化財センター『草刈遺跡』　昭和60年 千葉県文化財センター「草刈遺跡（B区）」（『千原台ニュータウン』Ⅲ）昭和61年
馬蹄形	一部消滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
馬蹄形	発　掘 消　滅	市原市文化財研究協議会『市原市遺跡分布図』　昭和46年 鷹野光行「市原市菊間手永貝塚採集の土器片」（『伊知波良』3）　昭和55年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
馬蹄形	消　滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
地　点	消　滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年
地　点	消　滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年
地　点		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年
地　点		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年
点　在	消　滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年

洋性のダンベイキサゴが含まれていることから察すると、このあたりの縄文人は九十九里海岸と密接な関係にあることがわかる。

次に、村田川中流域では左岸に中期と思われる西鹿ノ原の地点貝塚と、支谷の左岸台地に多竜台の馬蹄形貝塚がある。後期と思われるが詳細は不明である。

下流域では左岸の大廐支谷の奥に堀之内式期と思われる辰巳台貝塚があり、これより約1キロ下った左岸に小幡神社貝塚、菊間台地の北端部に福寿院・北野谷があるが、これら3貝塚の規模・内容は全く不明である。ただ一つ北野谷貝塚の西方にある小支谷の左岸にある手永貝塚は早くから知られた後期の馬蹄形貝塚で、昭和40年代に発掘されたが、詳しい報告の刊行を見ていない。

一方右岸では、村田川の本流と通称茂呂谷津と呼ばれる支谷に狭まれた標高約30*m*の舌状台地の中央部南側に草刈貝塚がある。昭和54年以後、この台地一帯の住宅団地造成に伴なう遺跡の発掘調査の一環として行なわれているもので、貝塚の規模は径約160*m*の点在馬蹄形である。昭和61年の報告書によれば、阿玉台Ｉｂ式から加曽利ＥⅢ式までの住居址177軒・土壙573基早期の炉穴等が発見されているが、貝層形成の時期は中期である。（註１）　次に、茂呂谷津の谷口を形成する南側の舌状台地の突端部よりやや東寄りの所に加曽利Ｂ式期の点在貝塚杉ノ台がある。この谷を東方にさかのぼると、中ほどで４つの支谷に分かれる。この最も東側の谷奥に面する台地に大膳野南貝塚・大膳野北貝塚・大膳野北遺跡があり、その西側の谷奥に面する台地にも六通金山遺跡がある。さらに最も西側の谷奥に面して大金沢貝塚がある。いずれも標高50*m*前後を測る。右のうち大膳野南・大膳野北の両貝塚の貝層形成時期は後期であろう。大膳野北遺跡の調査によると、茅山式と思われる炉穴群と黒浜式期の住居址３・加曽利Ｅ式期７・阿玉台式期の土壙１が出土した。このうち加曽利Ｅ式期の住居址の１軒にハマグリ・シオフキ・アサリなどの貝ブロックがあった。（註２）　六通金山遺跡の調査では、茅山式期の炉穴群の外に加曽利ＥⅢ～Ⅳ式期の住居址５軒のうちの３軒にイボキサゴ・アラムシロ・ウミニナ・ハマグリなどを伴なう貝ブロックがあった。（註３）　また、小金沢貝塚の全面発掘調査によると、貝層形成以前の早期末葉と思われる炉穴群39、貝層を伴なわない加曽利ＥⅣ式期の住居址２、貝層を伴なう堀之内Ｉ式期の住居址17軒が発掘された。（註４）　つまり本貝塚は、近接する木戸作貝塚と全く同じ時期に、しかも全く同じ点在馬蹄形貝塚が形成されている点が注目される。

（千葉市文化財保護審議委員会会長）

註１　千葉県文化財センター「草刈遺跡Ｂ区」（『千原台ニュータウン』）Ⅲ　昭和61年
註２　千葉県文化財センター「大膳野北遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』）16　昭和60年
註３　千葉県文化財センター「六通金山遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』）11　昭和56年
註４　千葉県文化財センター「小金沢貝塚」（『千葉東南部ニュータウン』）10　昭和57年